

立正大学史料編纂室の年

vol.05

第5号 2019年3月

熊本 好宏氏（国士館史資料室専門員）

「国士館百年史編纂を巡って」

【第5回立正大学史料編纂室主催講習会・講演要旨】

この記事は、2018（平成30）年7月6日（金）に、立正大学品川キャンパスで開催しました第5回立正大学史料編纂室主催講習会の講演要旨をまとめたものです。今回の講師は国士館史資料室から熊本好宏氏をお招きしました。詳細な講演内容は『立正大学史紀要』第4号（2019年3月刊行予定）に掲載しております。併せてお読みいただけますと幸いです（編集担当）。

1. はじめに

今日は「国士館百年史編纂を巡って」というテーマでお話いたします。国士館は2017（平成29）年11月に創立100周年を迎えました。記念事業の1つで編纂事業を実施することになっており、「史料編」は2015（平成27）年に刊行しました。今度は「通史編」を刊行する計画で、ただいま編纂中です。学校法人国士館は、大学・大学院・高校・中学があります。大学は3キャンパスありまして、世田谷・町田・多摩に施設があります。1917（大正6）年に南青山に創立しまして、その2年後に世田谷キャンパスに移りました。創立者は柴田徳次郎で、福岡の出身です。26歳のときに国士館を創立しました。約100年で卒業生が16万人を超えています。

2. 百年史編纂事業までの経緯

国士館が歴史編纂を実施する前に、大学の同窓会を中心とする刊行事業が先行しており、『創立者柴田徳次郎伝』（大学同窓会編）が1978（昭和53）年に刊行され、その2年後には『柴田徳次郎言論集』が刊行されました。その後、1984（昭和59）年に『写真で見る国士館の歴史』（大学同窓会監修）、また、大学の各学部で20年史や30年史を10年おきに刊行しており、今でもその伝統が引き継がれています。

1983（昭和58）年ごろ、学内で大きな組織改革がなされ、その際に国士館の歴史、建学の精神の見直しが行なわれます。この過程で関連資料の収集が行われ、展示室ができあがり、国士館資料室が1989（平成元）年に開室しました。また、この間に国士館の年表も編集されました。

そして、国士館として「正史」を作らなければいけないという

意義のもと、1992（平成4）年頃から編纂作業を活動し、創立80周年の際に『国士館80年の歩み』という写真と文章を組み合わせたものを刊行しました。その10年後に『国士館九十年』を刊行、このときに『国士館百年史』を編纂するための委員会組織が発足しました。

3. 編纂組織・計画の経過

2003（平成15）年に当時の理事長が、創立100周年を見据えた編纂委員会を設置しました。当時は広報課の下に置かれていたものですから、なかなか進みませんでした。事務局を置かないと何も進まないという反省から、年史編纂室が置かれ、年史編纂を担当する理事も置かれました。後には、百年史編纂にあたって、年史編纂室と国士館資料室を統合して独立させ、理事会直下に国士館史資料室を置いて、職員を増やし、規程を定めました。

2009（平成21）年に、編纂委員会の下に専門委員会を置きました。実質の作業を進めるために専門委員会が基本計画を出し、それを編纂委員会、そのあと理事会に上程することにしました。当初、調査や再整理の期間を3年間取ってから、2013（平成25）年に百年史編纂の概要として、編纂物の構成、出版部数、具体的なスケジュール、編纂方針を決定しました。このころ、学園内でも創立100周年に向けて記念事業推進課が新設されました。

基本理念は、客観的歴史による学術研究に基づき、学外にもある関係資料をできるだけ収集し、資料に則った編纂をすることに



しました。編纂方針は、一次資料に基づくこと、国士館だけでなく同時代の社会的な背景も踏まえること、地域とのつながりを重視すること、建学の精神を踏まえることとしました。

このような経過で百年史編纂事業は、現在のところ「史料編」2巻と「ブックレット」が刊行されています。「史料編」2巻は上巻が戦前、下巻が戦後です。記念事業に募金していただいた方のうち、希望者に頒布しました。「ブックレット」は式典にいらっしゃる方々に配付しましたが、全文はウェブサイトで公開しました。

4. 編集作業

資料調査、整理と保存、雑誌記事等の目録作成を行ないながら、情報発信の観点から「研究年報」の刊行、展示なども実施しました。

「史料編」は、まず仮目次を作り、担当者を決め、史料リストができあがったら翻刻の作業に移りました。作業の前には、後の凡例につながるルール作成をしましたが、これには時間をかけています。そして、掲載しなければいけない事項を列挙して、それに該当する史料を精査していきました。

「ブックレット」ですが、本文・資料・写真を適宜に組み入れながら編集しました。

「通史編」は、資料等の制約のある中でどこまで事項を盛り込むのかを検討しながら、いま編集を進めています。

5. おわりに

大学史の意義は大きく変化してきていると思います。アイデン

ティティの確認、アカウントビリティ、大学の構成メンバーによる自己点検・評価の一面があり、式典用お土産品という意味づけから、学術的研究書としての沿革史へと編纂の意義は変化しています。

2011（平成23）年の公文書管理法から、アーカイブ

ズという用語が急速に浸透してきています。編纂事業の有無が、1つの大学評価の指標になるであろうという感もあります。

私たちは、百年史編纂の過程で、史料の電子化を進め、学内にオープンにするという作業を積み重ねています。活動の成果が見えやすいのは展示ですが、世田谷キャンパスにある国士館大講堂が2017（平成29）年に国登録有形文化財（建造物）になり、ここを会場に展示を実施しています。

駆け足になりましたが、国士館の百年史編纂事業とそれに関するお話をさせていただきました。ありがとうございました。

第4回 立正大学史料編纂室主催講習会
国士館百年史 編纂を巡って
講師：熊本 好宏 氏（国士館史料室 専門員）
日時：平成30年7月6日（金）18:00～19:30
会場：品川キャンパス1号館4階 第7会議室 (B)
対象：大学の教職員・学部生・大学院生、その他
アーカイブズに興味のある方
参加費：無料（どなたでもご参加いただけます！）
2017年に創立100周年を控え、現在『国士館百年史』を刊行中の国士館史料室から熊本好宏氏をお招きし、百年史編纂の経緯や、執筆・校正・刊行に関わる進行等の現状をお話いただきます。アーカイブズの活用という意味でも興味深い現在進行中の事例です。これから周年史を編纂する大学や企業などの担当者の方々に大いに役立つことと致し、皆様のご来場を心よりお待ちしております。
【問い合わせ】立正大学史料編纂室 品川キャンパス4号館1階
電話：03-5492-2590 Mail: uchiba@aisai.jp

大学史料編纂室所蔵史料紹介

「教場日誌」（日蓮宗大学中等科）、「当直日誌」（日蓮宗大学）

立正大学史料編纂室アーキビスト 島津 千登世

立正大学の前身である日蓮宗大学林は、1904（明治37）年4月1日に専門学校令による認可を受けて設立し、専門科（2年）、高等科（3年）、中等科（5年）が設置されました。その後1907（明治40）年には日蓮宗大学に名称変更、1924（大正13）年に大学令により立正大学が設立認可、1949（昭和24）年に新制大学として認可を受け現在に至ります。

今回紹介する所蔵史料は、日蓮宗大学中等科の「教場日誌」と日蓮宗大学の「当直日誌」です。現存しているのは1918（大正7）年の中等科1年級A組・B組、中等科2年級、中等科3年級、中等科4年級、中等科5年級、1920（大正9）年の中等科2年A組の「教場日誌」7冊と、1918（大正7）年の「当直日誌」1冊で、当時の学内の様子を知ることができます（写真1）。

日蓮宗大学は、1916（大正5）年3月8日、本館教室より出火し教室棟・講堂・図書館・寄宿舎など合計9棟約850坪を焼失しました。『日宗新報 第千参百七十七號』（同年5月8日発行、日宗新報社）には当時開催された第九臨時宗会の全記録が掲載されており、出火の様子が詳しく書かれています。

「宗門全體が心血を漉ぎ來れる學校を焼失したる段一つに學校當事者の不行届の然らしむる所にてなんとも中（ママ）譚なし、出火は三月八日午後八時前後場所は教室の南寄り二階の中等科二年と中等科四年との教室の間なり、出火の原因は今日尚不明なり、その日中等科二年級に於て午前十一時頃までストーブをたき、四年級に於ては朝來一度もストーブをたかざる由、この出火箇所と覺しきその教室の近く柔道部に懸けたる電線のあれば或は漏電より出火せるや、二年級に於てたきしストーブの残火より出火せしや不明なるを以て止むなく警察へは過失の届出をなし置けり。新教室、會計事務所柔道部水事場を除き全部焼失せり。當夜學長以下學監教頭外數名、學年試験の打合學則改正の相談の為め午後七時頃までは居りたり。図書館焼失の為め図書的大部分を焼失したるは非常なる不幸と謂ふべく但し宗部に関するものは大部分取出したり、猶事務所にありし重要書類は學僕の応急の処置宜しかりしを以て取出されたり、不幸中の幸とも云ふべきは負傷者を一名も出さざりし事なり」

出火当時の学長は第5代の杉田日布で、第16代学長を務めた石橋湛山の実父でもあります。

白熱する議論は6日間にわたり、焼失の責任問題、再建方法や特別予算案、大学の財団法人化にも及びました。さらには中等科存廃論戦も巻き起こり存中論者と廃中論者が舌戦を繰り返しますが、存中論が14名、廃中論が11名と、廃中案の否決をもって終結します。

その後宗会の議題は日蓮宗大学の移転に移りました。大学部は大崎に置くも、中等科は池上に移すという提案もなされましたが、『日宗新報 第千四百貳號』(1917〔大正6〕年3月1日発行、日宗新報社)によれば、第十宗会の経過として「日蓮宗大学は大学科を東京市承教寺境内に移転し中等科を現大崎大学所在地に別置す」とあり、大学問題が無事円満解決したことは喜ばしいと記されています。しかし一方で学生たちは移転反対を懇願し、結果としていずれも大崎の地に再建されることとなり、同年5月28日に新築校舎の上棟式が行われました。

『月刊宗報 第七號』(同年6月10日発行、日蓮宗宗務院)の「宗門時報」欄には写真付きで「日蓮宗大學新築校舎上棟式」の記事が掲載されています。式の参列者は宗務總監以下宗務役員をはじめ大学職員生徒も併せて450名に及び、続く日蓮宗管長大僧正の喜多村日修による奉告文にもその様子が書かれています。

「本日日蓮宗大學中等科教室上棟ノ式ヲ擧クルニ當リ管長日修恭シク工程及經過ヲ佛祖三寶ニ報告シ奉ル 顧ミレバ客歳三月舊校舎烏有二爵スルノ後正一年有徐學宗銳意再興ヲ急キ設計者工學博士辰野金吾及棟梁森安之助ヲシテ工事ニ着手セシメ本日ヲ以テ既ニ豫定ノ工程ヲ竣ヘ茲ニ上棟ノ式ヲ擧グルニ至ル」

文中の「設計者工學博士辰野金吾」とあるのは、日本を代表する建築家であり、東京駅や日本銀行本店の建築でも知られる辰野金吾のことで、校舎再建の設計と技術監督を依頼しました。

「教場日誌」は、生徒たちが記録した学級日誌です。記載欄は、年月日、天候、当番、日誌当番、課業、在籍数、欠席数、出席数、欠席生、遅刻生、早引生、欠課正、摘要となっています。宗立大学らしく、課業の欄には、「台乗」(天台宗)、「宗乘」(日蓮宗)、「余乘」(他



(写真1) 1918 (大正7) 年、1920 (大正9) 年の「教場日誌」、1918 (大正7) 年の「当直日誌」

宗) もあります。中等科2年級B組の摘要欄には学期試験を終えて大掃除を行ったことや、在籍者数が違っていたことを発見したので訂正したこと、あるいは休講の先生を心配するなど、生徒たちの学校での出来事が書かれています (写真2)。

「当直日誌」は1918 (大正7) 年1月9日から翌年3月12日までの記録で、記載内容はまちまちですが、中等科出席・欠席数、補習科出席・欠席数、在籍生徒数、教授の欠勤や行事に関する事柄、教場日誌を書かずに帰ったことや教場の点検や清掃を怠ったことに対して生徒に注意したことなども記されています。

『日宗新報 第千四百二十七號』(1918〔大正7〕年6月20日発行、日宗新報社)によれば、当時学内では落慶記念文篇の大募集が行われ、その課題は「日蓮宗大学に対する希望」でした。校舎の焼失という難難辛苦を乗り越えて新たな校舎を再建し、大学全体が



左：
[右頁：摘要欄] 大正七年七月十日水曜日
八日ヨリ三日ニ互リテ劇烈ナル学期試験モ本日ヲ以テ最終トス。一同、級ノ大掃除ヲ施行ス。本級ニ限り、行ヒ来リタル掃除清潔ハ本日ニ至リテ其効ノ顕著ナルヲ覺ユ。
[左頁：摘要欄] 大正七年九月三日火曜日
第二学期最初ノ当直トシテ当直生全部意気堂堂タリ

右：
[右頁：摘要欄] 大正八年二月四日火曜日
浅井先生御欠勤のため台乗休。従来、在籍三十八名と信じ居たが、本日その誤なるを発見して三十七名と訂正す。



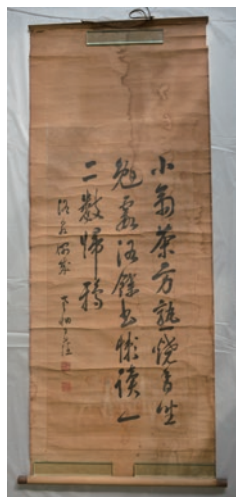
(写真2) 1918 (大正7) 年 教場日誌 中等科貳年級B組

大きく前進した時期でもあり、当時の学内の様子を垣間見ること

ができる貴重な史料となっています。

平成 30 年度購入史料の紹介

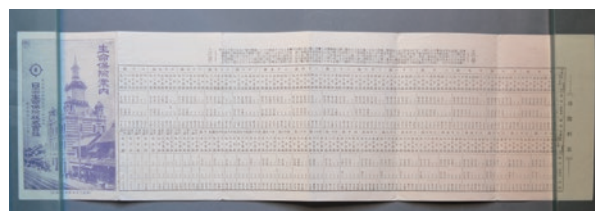
本年度より本室では、大学アーカイブズの充実を図り、積極的な史料の購入を始めました。
平成 30 年度内に本室で購入した史料は、23 点に及びます。ここでは、その一部をご紹介します。



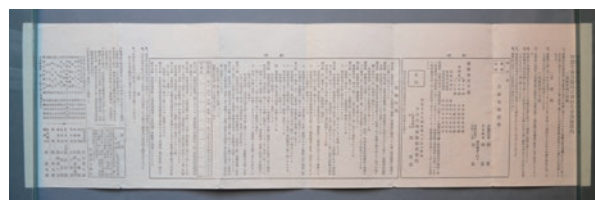
① 学祖・新居日薩筆・掛軸



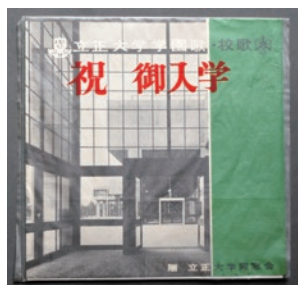
② 日生命保険株式会社生命保険案内



②-1 「保険料表」



②-2 「保険料金証券」「保険約款」



③ ソノシート「立正大学学園歌・校歌」(立正大学同窓会作成)



④ 『アサヒグラフ』通巻 1688 号(朝日新聞社、昭和 31 年 12 月 30 日発行)
※第 16 代学長・石橋湛山氏掲載



⑤ 『スペースデザイン』第 32 号
(鹿島研究出版会、昭和 42 年 7 月 1 日発行)



⑥ 「新橋演舞場十周年記念新派大合同二月公演」図録
※第 16 代学長・石橋湛山氏の祝いの言葉を掲載

